

ケネス・デール著  
『神はいずこに 聖なる神秘の黙想』を読む  
(序文および第1章)

Reading Kenneth J. Dale's *Where in the World is God?* (Preface and Chapter 1)

谷 口 真理子

Mariko TANIGUCHI

ケネス・J・デール著『神はいずこに 聖なる神秘の黙想』が2023年3月末にキリスト新聞社から出版された。著者ケネス・デール師は1926年米国生まれ、戦後間もない日本に米国福音ルーテル教会宣教師として来日、1951年山口県宇部で伝道を開始する。宇部での最初の礼拝は、デール夫妻と日本人信者3人であったという。その後、神学校から招かれて東京に移り、1961年からルーテル学院大学及び日本ルーテル神学校教授、1982年ルーテル学院大学で「人間成長とカウンセリング研究所」(PGC)を創設。45年間日本で宣教に携わった後、1996年、米国に戻り、カリフォルニア州クレアモントにある「ピルグリム・プレイス」に在住、現在97才である(2023年8月時点)。本書は著者94才の時に出版された*Where in the World is God? Reflections on the Sacred Mystery* (Resource Publication, 2019)の翻訳である。(谷口真理子訳 デール・パストラル・センター監訳)

著者は、*A Seeker's Journal* (2003, 邦訳『求道者の旅』2009年)、*A Mosaic of Musings* (2010)、*90 at 90* (2015, 邦訳『90才の信仰エッ

セイ90』2016年)で、項目ごとの思索・日々の黙想形式・短いエッセイと、さまざまな様式を試みてきたが、今回はついに詩の形式である。神の神秘は詩でしか表わせないとある聖人は言ったが、師の思索や洞察のエッセンスが詩形式のミニエッセイに凝縮されていて、よりストレートに伝わってくる。この著作ではジェンダーフリーな表現を試みている。また、初期教父時代の神学から現代の新しいプロGRESS神学、また無神論まで、幅広く思索し紹介している。

90才を越えた師のメッセージは、いのちの神秘に日々向き合う高齢の方々に深く染み透ることであろう。しかし、師は本書を特に若い人(とりわけ35歳以下の人)に読んで欲しいと述べている。また、世俗的な日本社会の中で、スピリチュアルな深い求めを満たすものを心の奥深くで探し求めている方々の役に立つのでは、と述べている。アメリカ社会において宗教への所属は急速に減少しているが、スピリチュアリティへの関心が高まっている。ある世論調査では、アメリカ国民の20%が「スピリチュアルだが宗教的ではな

い」を選択したという。現代における spirituality（霊性）の要求の広まりは、「時のしるし」である、と言われている（『新千年期の初めに』33）。しかしながら、日本社会にはさまざまなカルトが存在している。真の生ける神に出会って欲しいという、日本を思う宣教師の熱い思いを受け止めたい。多くの人が持っている神への渇きにふさわしく応えることは、現代が直面している課題である。

語り口は優しく、誠実な言葉選びである。師の著作には独特の揺らぎがある。それは「デール先生」らしい要素である。問いながら思索し、揺らぎながら感性と直感がきらめく筆は、強靱な論理展開ではない。この本を読む体験は、師と共に広い庭園をゆっくり歩きながら「神」について対話しているかのようなのである。各章の揺れ動く思索と洞察のエッセンスを以下にまとめてみる。今回はまず第1章のエッセンスをまとめ、幾つかの要点に解説と関連資料を加え、読者の探索の旅を助けたい。

### 「新しい見方はできるのでしょうか」の要旨

今日においても、なぜ多くの人が神を求め、神を探し、神に祈るのか。「神」とはどのようなお方なのか？著者は新たな視点を試みる。まずは既存の神のイメージを消し去る試みをしている。

神は、日曜学校で私たちが記憶してしまった「天の優しい老人」ではない。「上にいるどなたか」でもない。伝統的なイメージより、はるかに捉え難い。神についてイメージもっているなら、それは偶像かもしれない。私たちが神のイメージを抱いたとしても、それは絶えず刷新されなければならないであろう。神は私たちの想像や理解を超えたお方である。想像して、神を人間の似姿にしてはな

らない。

神は言葉で言い表せないお方であり、定義できないのである。誰も知らない「知られざるお方」である。神は、隠れておられる。神は、見えない「力」であり、存在そのもののお方である。神は「私はある、わたしはあるという者だ」というお方なのである。神はあらゆるところにおいでになる。自然のサイクルの中に神はおられる。神は、今ここにおられる。私たちの体は、見えない神の霊が受肉される器である。神は、遠い天におられる離れた存在ではなく、被造物の中に共におられる。私の中に、あなたの中におられる。「天国」は私の中にある。

神を思考や分析によって概念化することはできないが、五感・直観・感情・直接的な体験などによって「知る」のである。私たちが感覚器官を通して感じるものは、たえずいのちの祝福である。「自分がここにいる」ことはなんと不思議なことであろうか。

神は私の内におられ、同時に私を超えた所におられる。権威に満ちた創造主である神は、同時に苦しむ人と共に苦しむ神である。こうした神のパラドックスは、三位一体として表現される。

神はいのちの中心に在られるが、完全に支配しておられるのではない。神は、被造物自体の原理に従って動く世界をお造りになった。この世界には善もあるが悪もある。善と悪はコインの裏表で共存している。

私たちの内側には根源的なものを求める深い渴望がある。それは実存的な渴望、人間存在の根源的な渇きである。人間の深いところ

にある憧れ。それは、人間の深みである霊において、人間が「神の似姿the image of God」に創られているからではないだろうか。人間の霊 (spirit) は、消えることのない「神の御姿the image of God」を憧れ探し求める。

### 解説と関連資料

#### この本の題名「神はいずこに」*Where in the World is God?*について

この原題は、文字通りには「世界のどこに神はいるのか?」であり、また、「一体全体どこに神はいるのですか?」という強い問いでもある。「神よ、あなたはどこにおられるのですか」と探し求める問いである。エマオの弟子たちは「どこに泊まっておられるのですか」(どこにとどまっておられるのですか)と問い求めている(ヨハネ1:38)。「主よ、いつまで、御顔を私から隠しておられるのか。いつまで、私の魂は思い煩い 日々の嘆きが心を去らないのか。」(詩編13:2-3, 本著p.20)「私の魂は出ていきます。求めても、あの人は見つかりません。呼び求めても、答えてはくれません。」(雅歌5:6) 見えなくなってしまった方、隠れた方を探し求める熱い叫びは、心の深みから根源なるお方を探し求める、私たちのものでもある。

この章のタイトル「新しい見方はできるのでしょうか」の原題は“Is a New Paradigm Possible?”である。パラダイム・シフトは可能か、ということである。デイヴィッド・ボッシュの『宣教のパラダイム転換』が想起されるタイトルである。パラダイムは「ものの見方の枠組み」であり、時代が変わって枠組みが変わると、それまでのものが問い直され、見直されるのがパラダイム・シフトである。それはパラダイム・チェンジとは異なる。(パラダイム・チェンジは、ユダヤ教からキ

リスト教への改宗など、根本的な宗教の変更である。『宣教のパラダイム転換』上巻 p.10)

探し求めている人々は、現代の自分たちにふさわしい新しいパラダイムを探している(本著p.21)。「生きた神」を知るための新しい手段、新しいぶどう酒を入れるための「新しい革袋」をたえず探している(p.27)。そのためには見方・発想の転換が必要である。

#### 隠れた神

神は隠れておられる。見えず、知ることはできず、不可知の雲に包まれている。主である神は雲に包まれており(出エジプト記34:5)、拝顔不可能である(出エジプト記33:20)。神を見た人はおらず(ヨハネ福音書1:18)、誰も知らないお方なのである。神を探すことは、不知の知を探ることである。

#### 定義したり想像した神は真の神ではない

「天の優しい老人」のように、私たちは神のイメージを造ってしまうが、それは「真の神」ではない。このお方を定義することはできない。言い表せないお方である。人間の理性の光は役に立たないので、知られざる隠れたお方を探す旅は、暗夜の旅である(p.21)。神を想像すればそれは限定的な特定の神であり、偶像である。神は「○○でない」と否定形でしか表現できない。エックハルトのように「神よ、わたしから神を取り除いてください」と、思い描いてしまった神をたえず刷新する必要がある。真の神はたえず新しいお方である。決めつけて固定観念化した神を神としているとしたら、十戒「あなたは、私をおいてほかに神があってはならない。いかなる像も造ってはならない。」に触れることになる。(出エジプト記20:3-7, 申命記5:7-8) 神は「ありのままの自分を受けとめてほしい」と思っていらっしゃる。

## 内におられる神

神は「上にいるどなたか」という概念もそぎ落とす必要がある。神は、遠いどこかに居られるお方ではなく、被造物の中に、私の中におられるお方である。「主は天からくだり」「主イエスは、天に上げられ、父の右の座に着かれた」などにも、新しい解釈が見いだされるだろう。

神は被造物の中に、共に、またその下におられる（ガラテヤ2：20、コロサイ3：11など）。神はあらゆるところにおいてになる「実在Reality」であり、存在そのものである。人間の誕生や死を含む、自然のサイクルの中にも、神はおられる。これは、物質的なモノと神を一体化する汎神論（pantheism自然のすべてが神であるとする立場）とは異なる。神と被造物の間には違い（distinction）がある。しかし、神と被造物は切り離され分断している（separation）のではない。この物質世界・霊的世界両方は神から分離していないのだから、今この場所が神がおられるところである。

見えない神の霊は、塵から造られた土の器（創世記2：6、Ⅱコリント4：7）に受肉される。私たちは神の神殿である（Ⅰコリント3：16、Ⅱコリント6：16）。神の霊は、私の内におられ、天国は私の内にある。（ルカ17：21、ヨハネ17：21-23、ガラテヤ2：20）私たちはキリストの体である。（Ⅰコリント12：27、エフェソ5：30、コロサイ3：15）

「あなたはわたしのうちにおられたのに、わたしは外にあってむなしくあなたを外に求めた。」（アウグスティヌス）

「おお靈魂よ、外に何をさがすのか？あなたは自分の内に、あなたが憧れ求めている愛するお方を所有しているのだ。喜べ。あなたの上に沈潜して、喜び躍れ。外に彼を探し求

めに行くな。（十字架のヨハネ『霊の賛歌』第1の歌 解説8）

「おお不変の神、私の魂を静め、これをあなたのお気に入りの住居（住まい）、憩いの場、あなたの天国としてください。」（三位一体のエリザベト、「三位一体の祈り」）

「神の現存とはなんとすばらしいのでしょうか。私の天国、心の深みで主とお会いするのが大好きです。主はそこを決して離れられませんから。」「神はわたしのうちに、私は神のうちに。」（三位一体のエリザベト、『あかつきより神を求めて』p.54）

「悔い改めよ。天の国は近づいた。（The Kingdom of God is at hand.）」（マタイ4：17）

神の国は、遠く離れているのではなく、すぐ近くだから、回心して転換し、新しい見方をしなさい、とイエスは「ラディカルな転換（radical shift）」を求めている。「ここも神のみ国なれば」（讃美歌90）神の国はまさにここにある。

離れた所ではなく私たちの内におられる神をどのように賛美するのか？私たちは、被造物を賛美することによって、内なる神を賛美することができる。いのちの賛美・感謝・畏敬である。私たちを取り巻く世界を大事にし、敬い、愛することは、私たちの霊性（spirituality）の流露である。

「お造りになったあらゆるものによって主が賛美されますように。兄弟である太陽によって。

姉妹である月と星によって。風・大気・雲・すべての季節によって。水・火・大地によって。

姉妹である肉体の死によって。」（アシジのフランシスコ [太陽の賛歌] から）

「雨と露は神を賛美し、すべての風は神を

たたえよ。火と暑さは神を賛美し、冬の厳しさも神をたたえよ。…氷と雪は神を賛美し、夜も昼も神をたたえよ。…海も川も神をたたえよ。海の獣、水に住む生き物は神を賛美し、空の鳥は神をたたえよ。野の獣と家畜は神を賛美し、すべての人は神をたたえよ。」(旧約続編『ダニエル書補遺』34-59)

### 疑問をもってよい

神や聖書に疑問を持つことに抵抗を感じる人もいるかもしれない。(本書の「はじめに」p.16に述べられているが、米国では聖書に疑問を持つことに抵抗がある人も多いという。)神は「すべてにおけるすべて」(Iコリント15:28, エフェソ4:6)であり、現実(实在Reality)そのもの、真理(Truth)そのものなのだから、私たちがどんなにたくさん疑問をぶつけても、神は損なわれるはずはない。私たちは自由に問うてよいのだ。

### 悪はなぜあるのか

聖書において、悪の起源は明確ではない。悪魔は神に反抗した天使だったともいわれる(墮天使)。

悪魔(サタン)は、神の御心とは反対の行動をするように人間を誘惑する。神との関係を断ち切ろうとするのが悪霊の仕業である。聖書の各所に悪霊・ベルゼブル・悪魔(サタン)が登場する。

全能の神(almighty God)は、すべてを支配なさっているのではない。世界の善悪の支配はなさらない。神は世界を創造されたとき、被造物自体の原理に従って動く世界をお造りになった。良いことと悪いことのおこる世界を、お造りになった。これが世界のあり方、自由な人間のあり方なのだ。

弱さと力・善と悪は、表裏一体で、わたしたちのふるまいには善と悪の両方がからみあっている。

善の裏面は悪であり、陰と陽のように対を成して1つのものである。非二元論である。一見対立するものは互いに補足しあって一体となっている。(ウィリアム・ジョンストン『愛と英知の道』p389)

「毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。」(マタイ13:29-30)

### 神のパラドックス

万物の創造において壮大で威光に満ちた創造主である神は、同時にここに共におられて私たちの悲しみや喜びを共にされ苦しまれるインマヌエルの神(マタイ1:23)、憐れみの神である(出エジプト記3:7, 34:6)。この矛盾する本質の神が、キリスト教信仰の独特な中核である。このパラドックスの中に神の神秘がある。私の内におられながら、全宇宙の創造者として超越しておられるお方である(『求道者の旅 p.70])。善と悪が表裏一体であるように、神ご自身も相反する矛盾に満ちた本質を内包しておられる。初期の教父たちは、この神の本質を三位一体(父、子、聖霊)という奥行でとらえた。この聖三位の奥行き・深さを、三位一体のエリザベトは「淵」と呼んでいる。

「おお聖三位、わたしのすべて、わたしの至福、無限の孤独、私を沈める果てしない淵よ」(三位一体のエリザベトの祈り)

ポール・ティリッヒは「深み」としての神について語っているという(『求道者の旅』p.28)。

## 霊 (spirit) と魂 (soul)

聖書では人間は「霊・魂・からだ」の3つの部分から成る。霊は、人間の最も深く最も貴い部分で、これによって人は理解しがたい、見えない、永遠なるものを把握する（『ルター著作選集』 p.308）。

他方、魂はいのちと置き換えられうる。神は人間のいのちの不可欠な部分である。「魂は、体に生命を与え、体を通して働く」（『ルター選集』 p.308）。魂（ギリシャ語 プシキケー）は人格の中心部分、自己・自我を形成する。そして、魂の奥深くに霊（ギリシャ語 プネウマ）が存在する。霊は神と人格的な交わりを持つ能力である。人の中に神はおられる。どんな大罪を犯した人であっても、その中に神はおられる（十字架のヨハネ）。

「私の魂は主をあがめ、私の霊は救い主である神を喜びたたえます。（My soul glorifies the Lord and my spirit rejoices in God my Savior.）」（ルカ 1：47）

ルターはこの「私の魂」を「私の全生命・全存在・私の全感覚・全能力」と解釈している（『ルター著作選集』 p.313）。

「わたしはある。わたしはあるという者だ」 I am who I am.

出エジプト記 3：14に神がご自身を表わされた箇所がある。それは「わたしはある。私はあるという者だ。（I am. I am who I am.）」という一瞬の風のようなひとこと。これは、ヘブライ語で「エイエ（I am）・アシエル（who）・エイエ（I am）」であり、その「エイエ アシエル エイエ」の三人称単数が、YHWHという子音で表される。発音は不明。日本語の聖書ではすべて「主」となっている。（英語ではLord）

ゲッセマネの園でイエスが「わたしであ

る。I am.」と言われたとき、兵士たちは皆その場に倒れた（ヨハネ18：6）。

イスラエルの民は、有形で触れられるモノを礼拝することをやめ、内へ深く入ってあの神秘の現存のお方（that mysterious Presence）を礼拝するようにと、神に告げられたのである。

## 霊性・スピリチュアリティ (spirituality)

人間には、心の深いところで、自然を超えた何かを求める渴望がある。根源的なものを求める深い願いがある。（本著p.12, p.40）。霊性 (spirituality) とは、人間の内側深くで、神に気づき出合い、神と交わる能力である。神に属する部分であり、東方教会では「属神性」と言う。今日、宗教に属する人は減少しているが、個人的なスピリチュアリティへの関心は高いという（本著 序文p.9）。

神がご自身のimage（似姿、かたどり、面影、残像）として人間をお創りになり、私たちの深いところに神のimageがあるゆえ、それに招かれ渇き憧れ探す。消すことのできないこの実存的な渴望は、神のみが満たすことができる。

「谷川の水を求めて喘ぎさまよう鹿のように、神よ、私はあなたを慕う」（詩編42）

「あなたの生命が湧き出てくる場所への深い底を探りなさい。その源泉にのみ、答えが見いだされるでしょう。」（『若き詩人への手紙』 リルケ）

「恋しい人の言葉を追って私の魂は出て行きます。求めても、あの人は見つかりません。呼び求めても答えてくれません。」（雅歌 5：6）

「霊」は、自分の弱さ・はかなさの中で、神のあわれみに出会うための開きである。

image of Godは愛の傷として魂の奥底に刻まれているのかもしれない。

「私を傷つけておいて、鹿のように、あなたは逃げてしまわれました。叫びながら私はあなたを追って出てゆきました。でも、あなたは、もう、いらっしゃらなかった。」(第1の歌) 「なぜこの心をいやしてくださらない? これを傷つけたのはあなたですのに。」(第9の歌) 「あなたの現存を私にあらわしてください。…あなたは知っておられます、愛の病気は、愛人の現存とその顔を見るほかに癒すすべのないことを。」(『霊の賛歌』 第11の歌)

## 参考文献

- 新共同訳 聖書 日本聖書協会  
伊従信子 (1986) 『あかつきより神を求めて 三位一体のエリザベットの生涯』, ドン・ボスコ社.  
十字架の聖ヨハネ 東京女子カルメル会訳 (1963) 『霊の賛歌』, ドン・ボスコ社.  
ウィリアム・ジョンストン 九里彰監訳 (2017) 『愛と英知の道』, サンパウロ.  
ケネス J. デール 小山栄一訳 (2009) 『求道者の旅』, リトン.  
中川博道 (2015) 『存在の根を探して』, オリエンズ宗教研究所.  
ヨハネ・パウロ二世 (2001) 使徒的書簡『新千年紀の初めに』.  
デイヴィッド・ボッシュ 東京ミッション研究所訳 (1999) 『宣教のパラダイム転換』, 東京ミッション研究所.  
リルケ 高安国世訳 (1953) 『若き詩人への手紙』, 新潮文庫.  
マルティン・ルター 徳善義和ほか訳 (2012) 『ルター著作選集』, 教文館.